

翻訳

*Amazing Grace: William Wilberforce and the Heroic Campaign to end Slavery*¹ 抄訳（第四章）

久保光彦

本稿は、2007年に出版された、エリック・メタクサスの筆によるウィリアム・ウィルバーフォースの伝記の抜粋（第四章全訳）である。周知のように、ウィルバーフォースは、リンカーンのアメリカにおける奴隷解放運動に影響を及ぼした人物として知られている。本書は、2006年に封切られたヨアン・グリフィス主演の映画『アメージング・グレース』（本邦公開は2011年）に付随する形で出版された。

ウィルバーフォースの名前が良く知られているのは、メソジストの文脈であれば、ジョン・ウェスレーがその没する数日前にまさに死の床から書き送った手紙によってではないだろうか。有名な一節に、「しかし、もし神があなたと共にいるのなら、誰があなたに敵対できよう？彼らを束にしたところで、神よりも強いだろうか？善き行いにたゆむことなかれ。神の名と、その全能の力の中、さあ行くが良い。やがて（日の光を見た中で最も下劣な）アメリカの奴隷制が消え去るまでに。」とウェスレーはウィルバーフォースを鼓舞している。

何より強調されるべきことは、ウィルバーフォースは、キリスト者としての信念に基づき、何年にも渡る奴隷制廃止の戦いを戦ったということだ。ノーマン・サイクスは、ウィルバーフォースの奴隷制撤廃の働きを評して「この運

¹ Eric Metaxas, *Amazing Grace: William Wilberforce and the Heroic Campaign to End Slavery*. Harper: San Francisco, 2007. pp. 41-61. 原著者による翻訳許可済。

動がキリスト教の一般信徒によって導かれたという点で、特別な荣誉が与えられるべきである²」と書いている。ウィルバーフォースは聖書の言葉を真剣に受けとめ、世界を永久に変えた人物だ、ということもできる³。本稿の中でも触れられていることだが、ウィルバーフォースはすでに 24 歳にして、イギリス議会の中で注目を集める存在であり、名家の出であり、言うなれば超エリートであって、そういった意味では、サイクスが指摘するような「一般信徒」という枠組みには少々入れ込みにくいのだが、ともかくも、一キリスト者であったウィルバーフォースが、聖書信仰に立ち、奴隷制を廃止すべく、当時植民地政策に関連する奴隷制によって潤沢な利益を得ていたイギリス議会の中で良き戦いを戦ったということは、英雄的なものとして記録されるべきであろう。そして彼もまたメソジストの一人であったということは、重要な事実ではないだろうか。

ウィルバーフォースはその幼少時代にジョン・ニュートンと親交があったことでも知られている。もっとも、ウィルバーフォースはまだ子供であったが、ニュートンの回心記は幼いウィルバーフォースに少なからず影響を与えたであろうことは想像に難くない。彼が子供のころに、ニュートンに接していた事。そしてそれに付随する様々な人物、様々な要素が、後年彼をキリストの働きを議会の中でする器とするべく備えられていたということは、伝記の中からも伝わってくることである。

本稿は、ウィルバーフォースがキリスト教に正式に回心する部分を扱った章である。知性の塊のようなアイザック・ミルナーという人物と、アルプスの山を馬車で行きながら共に読み、白熱した議論を戦わせたフィリップ・ドドリッジの本、そしてそれに関する議論が、彼の回心に非常に大きな意味を持っていることは特筆すべきである。しかし、ミルナーとの対話だけがウィルバーフォースを回心に導いたのではなく、ニュートンとの幼少時のつながり、さらには彼のことを祈り続けていた親戚その他の人物たちがあってこそ、ウィ

² ノーマン・サイクス著、野谷啓二訳『イングランド文化と宗教伝統—近代文化形成の原動力となったキリスト教』、東京、開文社出版、2000年。p.151

³ メタクサスが今年の National Prayer Breakfast のスピーチで述べていることである。詳しくは、<http://c-spanvideo.org/program/NationalPrayerBreak> メタクサスのスピーチは 35 分 35 秒ころから始まる。

ルバーフォースの回心があったと考えることは決して困難な事ではない。

歴史に「もし」はあり得ないが、もし彼がここで回心していなければ、おそらくイギリス議会で奴隷制が廃止されることはなかっただろうし、あくまで推論だが、ひいてはリンカーンの奴隷解放もなかったかもしれない。

ミルナーではなくバーグ博士が旅の友であって、ベッシー・スミスがドッドリッジの本を旅に持っていかなければ、ウィルバーフォースの人生はただの英国の政治家として終わっていたかもしれないことを考えると、これは偶然などではなく、神がそなえた契機であったと考えることもできないだろうか。奇遇にも、ニュートンの友人であったウィリアム・カウパーが“*God Moves in Mysterious Ways*”という讃美歌を書き残しているが⁴、まさに不思議なように神がウィルバーフォースの人生に働かれた時期が、これから紹介する伝記の抄訳の中に記されていると言うことができるかもしれない。

⁴ <http://www.cyberhymnal.org/htm/g/m/gmovesmw.htm>

第四章 大いなる変化

わたしのような哀れなものを救った
素晴らしい恵みの　なんと甘美なひびきよ
かつて私は失われていたが　今や見いだされ
かつては見えなかったが、今は見える

ウィルバーフォースがロンドンに戻った時、彼は国民的英雄として帰還した。ずばぬけて野心にあふれた 24 歳として、自身も想像しなかったほど彼は波に乗っていた。息子のサムエルが記しているように、「彼は自らの精神を夢中にさせるだけのものをすでに持っており、一方で、満足げな野望の見込みは彼の目の前に無数に広がりつづけるようだった。彼は新しい国会の最初の審議に頻繁に出席し、得意気な多数派を増長させ、彼の友人の優位を確固たるものとした。」

1784 年の 5 月 14 日、彼はヨーク選挙区の議席を手に入れた。ウィルバーフォースのような協力者を下院で持つということは、「私の知る誰よりも偉大な雄弁さ」をウィルバーフォースは備えている、と述べたピットにとってこの上ないほどの恩恵であった。ウィルバーフォースのヨーク郡の議席を勝ち取るための一連の策略、そして彼が友人のピットをこのようにも劇的に助けたということは、ピットの政府に於ける大臣の役職を堅いものとするためだ、と多くのものが思っていた。もし彼がそれを望んだなら、役職が手に入っていたことは疑うまでもない。しかしウィルバーフォースはピットと特別な関係を持っていたので、そのようなことはしなかった。お互いの関係に敬意を表するあまり、彼が望めばどのような役職でもふさわしいとされたであろうに、ピットを使うことはしなかったのである。

ウィリアム・ウィルバーフォースは、齢 24 にして、イギリス議会の中で誰もが最も欲しがった議席を持っていた。彼を止めることは不可能にさえ見えた。彼の卓越した弁舌や才能そして魅力、そして首相が最も親しい友人であったことから、彼はどこまで登り続けるようにも思えた。しかしどこに登るのだろう。

ウィルバーフォースは知る由もなかった。

秋が訪れた時、ウィルバーフォースはフランスとイタリアのリビエラ海岸で冬を過ごす計画を立てた。それは特に彼の妹サリーのためだった。計画は馬車を二輛使うということだった。彼の母とサリーと従妹のベッシー・スミスが女中とともに普通の馬車に乗り、ウィルバーフォースと男性の友人が小さめの駆伝馬車で、彼女たちの先を行くという手はずだった。ウィルバーフォースはこの旅に関しての計画は特になかったけれど、会話を楽しむ相手が必要なのはわかりきった事だった。なぜなら、大陸のごつごつした道の上で、共に限らない時間を過ごすことになるからだ。

彼はヨークからの親友である、アイルランド人のウィリアム・バーグ博士を招いた。バーグは頭脳明晰で、健全な気質を持っていたが、招きに応じることが出来なかった。その晩夏、ウィルバーフォースと家族は、ヨークシャーの裕福層の多くが夏を過ごすスカーパーラを訪れた。彼はそこでアイザック・ミルナーと偶然出会った。ミルナーはリーズの織工の息子で、20年前には、ハルのグラマー・スクールでウィルバーフォースの家庭教師であった。今やミルナーはケンブリッジのクイーンズ・カレッジで個人指導教員をしており、学術的な交わりの中ではすでに有名になっていた。誰の判断でも、ミルナーは単純に彼自身という区分けに属するものだった。素晴らしく恵まれた体格を持ち、正真正銘の巨人であり、それは文字通りであり、また別の意味でもそうだった。ミルナーがどれほどの身長で、どれほどの体重だったかは知らない。しかし、ヘンリー・ソントンの娘マリアンによれば、彼は「応接間で会う運命だった人間の中で最も巨大な男であった。」彼は河馬^{ビヒモス}だった。

彼の知性に関していうと、それは完全に桁外れなものだった。実際、ケンブリッジにいたころ、それまでに前例がない、^{インコンパラビリス}比類ないものとしての称号を受けた。彼は今日の私たちが言うところの「超天才」なのだが、彼を見れば見るほど、その最上級の表現でさえ彼をしっかりと捉えてはいないという印象を受ける。それは馬鹿げているが、同時に真実でもある。事実はこういうことである。彼はまだ学部^{トリボス}にいた時に王立協会院に選ばれた。ケンブリッジの学位試験の成績はあまりにずばぬけていたため、試験官はほかの学位候補者と彼を空欄で隔てて成績簿につけたほどである。彼は物理学、化学、代数学、宗教の分野で傑

出し、また、ものを書いた。彼は1775年に按手を受ける。先に述べたように、彼は後に数学と物理学においてルーカシアン教授の席を占めることになる。さらに彼は「透明少女の仕掛け」のなぞ解きをやってみせたことで、ロンドンっ子の大衆的な想像力までも虜にした。それは手品師としての技能であって、レスター広場でそれが実演されたときには、目の玉が飛び出た群衆を、怒らせることにすらなかつた。これらの天才としての技能だけでは不満でもあるかのように、ミルナーは話術家としても知られ、その機知は伝説的なジョンソン博士の後継者的存在として認知されていた。周知のとおり、抑えることが出来ない陽気さで、若かりし頃のヨークシャー訛りで滑稽話をしたものだつた。ウィルバーフォース自身、ミルナーは会話において生き生きとして勢いがある」と述べている。否定的側面においてだが、彼は群を抜いた心気症持ちとして描写されている。雷と「東風」を、説明することはできないがしかし暴力的なまでに、毛嫌いしていた。

もし時代錯誤でなければ、ミルナーをチェスタトンのものとして置き換え、それで済ませてしまう誘惑に駆られるだろう。しかし、チェスタトンさへも、その巨体と圧倒的な偉業をもってしても、せいぜいある程度似通つた存在としかならない。ミルナーはバロン・ヴォン・ミュンヒハウゼンのほら話の中以外には、単純に存在することが出来なかつたのだ。しかしながら、彼はスカーパーラの競馬場に立ち、ちいさなマネキンのようなウィルバーフォースの上に巨人のように迫っていた。二人が並んでいる様子はサーカスのポスターを思わせただろう。普遍的にウィルバーフォースは小さいと説明され、5フィートを少し超えるくらいの身長と子供サイズの胴体を持っていた。彼の腰回りが後年計測されたときは33インチだつた。

ウィルバーフォースはミルナーと何年にも渡つてある程度の連絡は取っており、その関係は良好で下院にある画廊への券をウィルバーフォースが入手してあげたほどだ。そして今ウィルバーフォースはミルナーを大陸横断する旅に加わるように招いた。ミルナーはその申し出を受け入れ、彼らは10月20日にスカーパーラの競馬場を後にした。ミルナーとウィルバーフォースとともに先導する形で駅伝馬車に乗つたのだが、もし仮に読者が片一方に滑稽に傾いた駅伝馬車を想像することを禁じ得なかつたとしても、それは赦される。

ウィルバーフォースは船酔い持ちだったが、海峡を渡るところも順調にいった。ウィルバーフォースは消化器官の困難を生涯おぼえるのだが、それが何であったかとする事は難しい。彼はある種の潰瘍性大腸炎を患っていたようだ。フランスでは、彼らはまずリヨンに行った。ウィルバーフォースは、この地を「素敵な場所にあるが、一番汚い穴だ。特に私たちが投宿したサントーメルという宿は。」と述べている。大多数の裕福な英国からの旅行者はニースにおり、ウィルバーフォースと一行はいつものように彼らに交じり贅沢な食事やカード遊びに興じた。裕福層と絶えず共にあるものが流行であり、1780年代のフランスでは、動物磁気が大流行していた。メスメリズム、生物季節学、ユング分析、ゲシュタルト分析、自己啓発トレーニング、V8 結腸洗浄療法などのインチキ臭い各種流行の先駆けともいうべきものであろう。「磁気療法」において主だった人であったムッシュー・トゥリーという人物は、ミルナーとウィルバーフォースに施した彼の透明な芸術について筆を用いているが、二人のどちらも倒れることはなかった。ウィルバーフォースはその理由を「おそらく私たちの不信のゆえだろう」と述べている。しかしフレデリック・ノースというある人物は、トゥリーによってそこにいたことが誓われているが、彼の類まれなる磁気療法の力によって影響を受けた人物であり、ウィルバーフォースによれば、このノースという男は、「施術する部屋に入るや否や倒れこんだ。さらには、（この療法が）体の構造に影響を与えることが出来るのだと彼は述べた。しかし、ほかの部屋にいるときや、遠くにいるときは、その施術が行われていることには気づきもしないのだが。」

ウィルバーフォースの息子はこう書いている。「これらの情景の中でしばしば彼はミルナーに付き添われている。ミルナーの快活さと感覚と一体となったまるで磨かれたことのない礼儀作法は、彼の友人たちを喜ばせ続けた。」貴族の紳士淑女が、彼らより三倍も大きく、15人を束にしたよりも賢い、この野暮な職工の息子から何を得たかは誰もが疑問とするところである。ウィルバーフォースは後に、あまたある催しの一つの中で、若きグロースターのウィリアム王子に、九時近くになってミルナーが紹介されたときの話をして友人を楽しませた。大胆なヨークシャー訛りでミルナーは「かわいい坊や、かわいい坊や」と甘く語りかけ、奇妙な親しきで持って若い王子の頭を撫でたのだった。不思議なこ

とにこの若き王族は、すぐにも食べられてしまうかもしれないと恐れて、部屋から慌ただしく駆け出していくことはしなかった。

ウィルバーフォースは「ミルナーはすべての不道徳なげがれから自由であったが、他人に比べて宗教に気を使っているわけでもなかった。聖職者ではあったが、ニースに滞在している間ただの一度も祈祷文を読むことを考えもしなかった。どこから見ても彼は世間の一般の人間だった。わたしのように、どのような集団にも混ざり、他のものが用意周到にそうするように、流行だった日曜のパーティーに出席していた。実際、彼を旅の伴侶者としたとき、彼が深い部分に主義主張を持っているとは私は知らなかった」と言っている。

唯一知りえたであろうそれに関する手掛かりはスカーバラで知りえた情報だった。ウィルバーフォースはスティリングフィートという、ホザムの教区牧師のことに言及し、彼は「良い人間だが、物事を必要以上に進めてしまう」と言った。「ちっともそんなことはない」とミルナーは撃ち返してきた。その夕べ彼らが会話を続けたとき、ミルナーは自分の意見に踏みとどまった。ミルナーの気質は常に尽きることなくひょうきんなものだったが、この題材に関して彼は全く持って真面目に見えた。

「この宣告は私に衝撃を与えた」とウィルバーフォースは述べ、「この件に関しては未来にまた話し合うことを約束した。もしわたしが彼の意見がどのようなものであるかをあらかじめ知っていたなら、そのような申し出はしなかったのだが。まことに憐れみ深い手が私たちの知らない道を導いてくださり、私たちの計画や傾向無しでも、むしろそれらに対して、私たちを祝福してくださる。」

周囲の者と同様に、叔母と亡くなった叔父のメソジズムに関するどのようなことにおいても、ウィルバーフォースは力強くぼんやりした視点しか持ち合わせていなかった。メソジストはおしなべて「すべてのことを極端に行い」、恥ずかしい存在で、同時代人からは歩調の外れたものであった。ウィルバーフォースは明らかに、家のひさしにぶら下がっているかび臭い神学的なしょうがパンなどなくても、「極端に何かをしなくても」倫理的でよい人間になれるという確固たる意見があった。彼のほとんどの友人は彼のことを非常に倫理的でまっすぐな人間だと捉えていた。ウィルバーフォースはピットとペッパー・アーデンを、彼らが家に泊まりに来たときに、ウィンブルドンの教区教会に連れて行き

さえた。あるところまでは、全てが良かった。キリスト教徒と聖書の古い教義はその目的を当時において果たしていたが、それを信じまた説教するということは18世紀後期においては意図的に時代錯誤であり、おかしなことだった。なぜ進歩の大いなる導きに逆らって、足を引っ張られねばならないのだ？理性の陽光が啓蒙主義によってもたらされたのではなかったか？これらの適切で理性的な斜光が、悪臭立ち込める偏屈で宗教的な澱んだ沼地を射抜いたのではなかったか？アテネはとうとうエルサレムを打ち負かしたのではなかったのか？

彼がロンドンにいた時、ウィルバーフォースはエセックス通りの礼拝堂に赴き、現代のユニテリアン主義の「父」であるテオピロス・リンゼイ牧師の説教を何度か聞いた。リンゼイは、キリストの神性のような最も根幹的な教義を放棄した時、英国国教会を離れる勇気があった人物だった。同じ教義をほかの聖職者も何人も放棄したのだが、彼らは元いたところにとどまった。その結果として、人は英国中にある教会に—ウィルバーフォースがウィンブルドンでそうであったように—集いながらも、ニケア信経の鋭い教義で会衆を攻撃するような説教に苦しめられることはなかったのだ。

フランスをめぐる馬車の中で、ウィルバーフォースは時折若かりし頃の自らの信仰を嘲笑した。ミルナーはそれをうまく受け流し、それは彼にとっては必然的に単なる神学的探究以上のものだということを言うことを忘れずに、メソジストの正統な信仰を支持したのだった。神学者であり論理学者であったミルナーは、ウィルバーフォースが嘲った教義の内なる論理を見出し、あらゆる数学的定理を擁護するようにそれらを擁護したが、考えられるのは、ミルナー自身もそれらを単純な知性以上のものをもって信じていなかったかもしれないということだ。

ミルナーはウィルバーフォースが攻撃した教義に知的に同意していたので、ウィルバーフォースの嘲りが、ミルナーの良心をどのようにしてか突き刺したのだろう。しかし、よく人々がするように、単なる一面的なものとしたのかもしれない。人は何が正しいかを知ってはいても、少しの間はそれを手の届くところにとどめておき、放り投げることもしなければ抱きしめることもしない。これらの議論がウィルバーフォースにこれらの事柄についてもっと深く考えさせるように動機づけたように、ミルナー自身にも、この事柄についていままで

にないやり方で、熟考するように仕向けていたのだろう。

考えられるのは、ウィルバーフォースの嘲りは、嘲りという行為自体がそうであるように、真面目な議論に至らずに、岩の後ろから手当たり次第に皮肉を投げかけ、「姿を見せて男のように戦う」ことは不本意で恐れるべきこととする、単なる軽はずみなおしゃべりだったということだ。そうすると、ミルナーがある時こう宣言したことも説明がつく。「ウィルバーフォースよ、この集中砲火の中で、私とあなたは釣り合いが取れていない。しかしもしあなたがこれらの主題について真剣に議論したいのであれば、いつでもわたしは喜んであなたとそれを始める。」

さてウィルバーフォースはピットからの愛情こもった手紙を受け取った。その手紙は、ピットが議会改造の法案を提出するときに合わせてロンドンに帰還するようにと嘆願するものだった。それゆえ女性たちは穏やかな気候と太陽を楽しむためにそこに残り、ウィルバーフォースとミルナーはそこを離れることになった。ウィルバーフォースとミルナーは、会期を終えているはずの三か月後にニースで女性たちと、再開することにした。しかし今は彼らは去るのみだった。

しかし、1785年2月5日に、彼らがもう少しでそこを発とうとしているとき、ウィルバーフォースの目は、いとこのベッシー・スミスが持っていた一冊の本にとまり、彼はその本を取り上げた。その本は『魂における宗教の勃興と発展』と題された本で、フィリップ・ドッドリッジによってしるされたものだった。ベッシーはその本を母から借り、母はその本をエセックスの福音主義の聖職者でありウィリアム・カウパーと友人であったウィリアム・アンウィンから譲り受けたのだった。ウィルバーフォースはその本についての意見をミルナーに求めた。「この本は今までに書かれた本の中で最も優れたものの一冊だ」とミルナーは宣言した。「この本を旅に一緒に持っていき、道中読むことにしようじゃないか。」彼らはそうした。

ドッドリッジはこの本を1740年代の初期に書き、1751年に亡くなった。彼が生きていた時代は、特に神学的な真面目さにおいては、気難しさが聖職者の絶対条件だと感じられるような時代で、ドッドリッジも確かにそうであったのだろう。しかし、彼は実際には魅力的で、とりわけ陽気な人間として広く知ら

れていた。ある年老いた友人は彼を評して「ドッドリッジのように華やかな気性の人間は知らない」と言った。出版された『旅行書簡』は「上品な社会」の中で広く知られ、ウィルバーフォースとミルナーが今まさに論じ合おうとしている本は「理性に裏打ちされ」、「洗練された」ものと考えられており、ウィルバーフォースが持っていたような、非哲学的なメソジストの行き過ぎに対する流行の反感を持つ者には最適の書とされていた。

おなじみになった奇妙な二人組はドッドリッジの本を携えながら、ニースを離れ、アンティープを通った。革命で爆発する四年前のフランスで、北西の方向に来る日も来る日もガラガラ進む馬車の中で二人によって交わされた知的な会話を聞くために人は何を差し出すだろう。直線距離で、ニースの南側の海岸からカレーの北側の沿岸までは600マイルを超えるものであった。しかし、ねじれて舗装もされていない18世紀後半の道では、その距離は二倍だった。国会の議事そしてピットの決議に間に合うようにロンドンに戻るには、猛烈に飛ばす必要があった。ウィルバーフォースが言うには、「ミルナーと私は添乗員のディクソンと一緒に、最も早い道のりを急いだ。朝早く陽が出る前には出発し、闇が深まる後まで旅を続けた。」

フランスのアルプス山脈を横断するときの降雪量は非常なものだった。雪の中を18日間、彼らは旅をつづけ、馬車の中では旅行用のひざ掛けに快適そうにくるまり、白く輝くアルプスの景色をしっかりと吸収し、道すがらドッドリッジの本について議論した。まばゆく光る精神たちが永遠の事柄について出会い、山々の間を馬にひかれた馬車で航行し、というこの情景の桁外れの喜びは、ノームと巨人がガラスと銀の星で旅をして、世界の果てで井戸を見つけ、その井戸から飲むことで、宇宙の核心の隠された意味を知る、というようなおとぎ話から出てきたもののようにすら見える。ウィルバーフォースとミルナーにとっては、時として、幸せと言うよりは荒々しい、覚めたくない夢のようにも感じたであろう。

時として、特に凍った坂道を上るときは、彼らは馬車を降りその後ろを歩くことによって、二頭の馬の負荷を減らす必要があった。一度は、ある標高の地点で、彼らは同じことをしたのだが、馬車を降り、窮地に立った馬たちが凍りついた傾斜の上、馬車を引き上げていくその後ろを歩いていたのだが、突如

として馬車は氷の上を横滑りし始め、馬たちは足場を失い、馬車の重みは馬たちを後ろ向きに引きずりはじめ、断崖のへりまで追いやり始めた。必死に努力したものの、車夫にそれを止めることはできなかった。ヨークシャーの巨人であるミルナーが素早く行動に移り、彼自身で馬車をつかみ、あり得ない、漫画の登場人物のような力で、馬車が奈落の底に落ちるのを食い止め、二頭の驚いた馬が足場を確保し、道の上に帰すことが出来るようになるまでしっかりと抑えるまでは、それは恐怖が展開する情景だった。

丘の上で、ミルナーとウィルバーフォースは馬車に戻り、毛布にくるまって、彼らの後ろに広がるアルペンの雪景色とともに、議論に戻った。

サムエル・ウィルバーフォースはこう書いている。「粗野でがさつな哲学者と、穏やかで洗練された政治家との間の、生涯の終わりまで続くことになる確かな友情は深まった。」そして、アルペンの雪の中で、恍惚となるような議論に影響を受け、刺し通されたのはウィルバーフォースだった。彼は今や自分自身で聖書を研究しようと決心した。

二人がカレーに着き、海峡を渡り、ようやくロンドンにたどり着いたとき、ウィルバーフォースは外側から見れば今まで通りであったが、内側の深いところでは確かに何かが起こっていたが、その部分はしばらくの間隠されたままになっていた。一粒の種が彼の土壌の中に押し込まれ、水を与えられたのであって、しばらくすれば芽をだし、葉をつけ、隠すことが出来る可能性を超越するまでに成長するのだった。

今のところは、全てが以前と一緒だった。ウィルバーフォースは週に何度かピットと夕食を共にした。ピットの改革案とその他の手段に多大な努力がなされた。そして、常のように、一日は十分な量の歌と踊りで締めくくられ、それはしばしば夜遅くまで続けられ、ときには徹夜になることもあった。

しかしウィルバーフォースの個人の日記に、大地が動いていることの最初の兆候を見出すことが出来るのである。彼は「大いなる変化」と自らの回心をそれ以来呼ぶことになるが、それが始まったのだった。裕福な友人について彼は今はこう書く。「奇妙なことに、ほとんどの気前がよく宗教的な人間は、彼らの義務は財産に比例すると考えていない。」そして、彼らの飲み食いのために「浪費をすることによって罰を受けるとも考えていない」。『ドン・ファン』の物語

のオペラ公演での踊りを彼は「衝撃を受けるもの」と記しているのだが、観客があまりにうんざりとしており反応すらしなないことが、彼の中のなにかにことさらに触れた事だった。これらの観察を単純に倫理的なものとして片づけてしまうことは簡単だが、切実なのは、ウィルバーフォースがこの時期手に入れようと思えば入れることが出来たものたちである。金、遊興、賞賛、高い地位にいる友人たち。最も親愛なる寵児として彼を抱きしめた世界は、何でも彼が好むものをどっさりと与えることが出来た。しかし突如としてウィルバーフォースはその魅力に動かされない人間になっていた。ここへきてはじめて、彼はこれ以上のことがあると感じ取ったのだ。何かを彼を苦しめている、彼はそれを感じ始めているだけだったが、淡い光の中ではその形を理解することは無理だった。

ウィルバーフォースは今やとても奇妙で異質な考えを持つようになった。例えば、彼は、特権階級の一団の中で、非常に浮いてしまった輩の痛みを持っていた。ピット邸での非公式な夕食の後、「もったいぶったT氏と上品なC氏が、彼らのテーブルの後ろで給仕をしていた哀れな輩と同じ列に現れないだろうか」とずっと考えていた」と彼は日記に書いている。この時期の彼の思考に通じていた人間なら、数か月前は華やかで気苦労がなかったこの輩にいったい何が起こったのかと思惑しただろう。この男は、邪にそして皮肉を込めて、フォックスとともに下院の床を一掃し、ヨークの城の庭園では、敵を木端微塵にして、その地において国会で最も高い地位に昇るためならば、真理をあちこちで値下げすることなど問題にもしなかった男であり、何百回も夜明けまで食べて飲んで踊って歌った男である。この輩はいったいどこに行ってしまったのだろうか？

ウィルバーフォースとミルナーは大陸に五月に戻る計画を立てた。しかし議会は六月までもつれ込み、月末になっても閉会しなかった。そのためウィルバーフォースは会期終了以前にもかかわらずそこを発ち、再びミルナーを旅の同伴者として連れて行った。このたび英仏海峡を渡るときは、彼は船酔いにならなかつた。彼は船の船長に話しかけ、船長は自らがその目撃者である、羊毛と生きた羊が継続的に大量にブローニュに向けて違法に密輸されていることについて講義をぶった。ウィルバーフォースはその情報をピットに伝え、このことに関する行動は製布業界全体からの絶えざる信頼をもたらすだろうと提案し

た。

ウィルバーフォースの計画はジェノバにいる女性たちとおちあうことだった。出発が遅かったためにニース行は不可能となった。彼らにはできたことだが、その暑さが耐えられないということを見出す財的余裕がある人たちにとって、ニースはあまりに暑かった。であるので、彼とミルナーは地中海沿岸へ向けて逆向きに南下する旅を開始した。しかし今回は異なる経路をたどった。ウィルバーフォースは書いている。「私たちはスイスを通る経路を通った。それ以来私は特有の喜びを持ってその魅惑の景色を思い出さなかったことはない。特に巨大なアルプスのふもとと広大な庭インターラーケンの豊穡と美は素晴らしかった、」と。

そして、再び、ミルナーとウィルバーフォースは以前の会話を再開した。今回のテキストはドッドリッジではなく、ギリシア語の新約聖書で、その中の教義を彼らは吟味した。この進行形の会話の中で、数多くの「疑い、反対意見、困難」をウィルバーフォースがミルナーに押し付け、巨大な職工の息子は、答えを一つ一つ詳細に、そのヨークシャー育ちの低音で解き明かした。

ウィルバーフォースはその生涯を通じて、他にあまり例を見ない、身が引き締まるような知的正直さを持っていた。ケンブリッジでは、学位を受けるための古臭い義務と当時みなされていた、国教会の信仰箇条に同意する署名を求められた。しかし、ウィルバーフォースはそれを拒絶した。その当時彼は英国教会の教義に賛同していなかったし、少なくともそうであるかどうか自分で分かっていなかった。それゆえ、署名をすることはできず、学位（訳注・おそらく、学位の発行）は数年遅れることになった。今日のように、当時でも、ほとんどの人間が肩をすくめるか目くばせをしてこのような偽善を通る中、ウィルバーフォースはそのようなことはしなかった。

しかしいまやウィルバーフォースの知的正直さは違った方向に働こうとしていた。ミルナーが対談者として存在する今、彼は、数年前には同意することのできなかった、同じキリスト教の正統な教義を吟味した。彼は、何が真実なのかを知りたいように見えたが、今まで満足する発見に至ることはなかったのだ。彼は、もし満足することのできる真実を発見するなら、それを受け入れ、それによって行動することになるのを知っていた。持ってもいない信念に同意

する署名をしなかったように、もしある信念を持っていたらそれに立って行動することを彼は知っていた。しかも、その署名のように、細切れに忘れたころにはではなく、人生のすべてにおいてであった。一粒のからしだねはみるみる育ち、空の鳥が巣を作るほどになるのを彼は知っていた。思想は遠大な結果を伴うもので、人はその脳にどのようなものを入れるかについて注意深くなければならない。そして、ミルナーとの会話が継続する中、ウィルバーフォースには、空の鳥が彼の方角を狙っているのが見えるようだった。

計画通り、彼らはサリー、ウィルバーフォース夫人、そしてベッシー・スミスとジェノヴァで再会した。7月11日に、以前のように男二人を乗せた駅伝馬車が前を走り、女性を乗せた大型馬車が後ろを走り、北に向けてチュリンにいたり、さらにそこを越えてジュネーブへと到達した。この旅の間、ウィルバーフォースとミルナーは、女性たちが気付くほどの激しさで議論を遂行した。ウィルバーフォース夫人は、息子が以前にくらべ彼女たちの馬車に顔を出すことが少なくなったことをこぼした。哀れな、ほったらかしにされていたウィルバーフォース夫人！ただ彼女が、スティーブン・ホーキングとディック・キャヴェットとアンドレ・ザ・ジャイアントをひとつにしたような男と、息子の注意を引くことを争っていたことを知ってさえいれば。

ウィルバーフォースは書いている。「それらの考えは、私の理解によって同意された単なる意見であって、私の心に影響するものではないという状態が長いこと続いていたが、徐々に、私は（ミルナーの）感情を受け止めていた。しまいには、それらの重要さの意味も伴って、好印象を受けた。すべてのことにおいて軽薄なミルナーであるが、このことに関しては非常な真剣さを持って話し、彼が言ったことすべては私の宗教への関心を高める傾向にあった。」

インターラーケンで、ウィルバーフォースはユングフラウ山の絶妙な壮大さに畏敬の念を抱いた。自然に対する愛は、生涯を通じて続いたものであり、その山の超越した美は彼の心をかき回し、最も大事なことに考えを向けさせたはずだ。

九月初頭にベルギーのアルデンヌ地方に着き、六週間、14世紀から続く人気の水場であるスパという名前の名祖の町、スパで過ごした。彼らが言うように、みんながそこにおり、いつもやっていること、そしてこれからも継続して続けることをしていた。しかし、ウィルバーフォースはそうではなかった。そうすることが出来なかったのである。彼はほかの人がすることをほとんどした。踊り、歌い、当時の上流社会での流行であった終わらない食事に何時間も費やし、ふけていた。しかし、何か彼に起こっており、流行に敏感な人たちに囲まれ、流行の地スパにいた時、彼の新しい感情は、突然、特に劇場と安息日に関して自らを表現した。これらの二つの言葉は、福音主義者とメソジストの合い言葉であり、この二つの分野に関して彼らははっきりと社会と袂を分かっていた。

「クルー夫人は、劇に行くことが悪いと私が思っていることを信じられないようだ」と彼は日記に記している。「日曜日に立ち止まることが、母ではなく私の願いであることを聞いたことは彼女を驚かせた。」このことは確かにクルー夫人をあきれ返らせたことだろう。彼女は当時有名な社交の中心にいた人であり、その名高い美しさはジョシュア・レイノルズによって肖像画に記録されている。有名で、機知に富み、才気あふれるウィルバーフォースにとって、何かに対してしかめっ面をするということはとても動揺をおぼえることだったに違いない。もしほかの人であったら、クルー夫人は、そのような反応を却下し、彼女のパーティーの一つで、客の前でそのことをからかったことだろう。—この希望のない不快なメソジストは次は何を非難するのだろうか？—しかしウィルバーフォースはピットの親友であり、五つのクラブの会員であった。そして彼は非常に機知に富んでいた。もしかするとそのうち彼は私の行いを冷笑するかもしれない！

クルー夫人がそのことを知りえたかどうかは定かではないのだが、ウィルバーフォースは10月にスパでもう一つ似たようなことに関わっていた。「三、四日前に非常に早い時間に起きることを始めた。」と彼は書いている。「静寂と自己対話の中でいくつかの考えを持つに至り、わたしはそれらが実を結ぶと信じている。」

ウィルバーフォースが確かに前向きな一歩を踏み出したことは明白だった。

しかし、ゆっくりと、それに伴う代償を一步一步計算しながら、ではあったが。彼はこう書いている。「これらの事柄を真剣に反芻するやいなや、私の過去の深い罪悪感と黒い恩知らずが非常にはつきりと私に迫ってきた。そして私は、自分がかげがえのない時間、機会、才能を無駄にしてきたことを責めた。」

ウィルバーフォースの「大いなる変化」は一晩や一瞬では起こらなかった。聖パウロは光によって目をくらまされ一瞬で変えられ、絵の題材になるほどだっただろうが、ウィルバーフォースの変化はもっと緩やかなものだった。彼の回心体験はアウグスティヌスのそれに近い。アウグスティヌスはキリスト教信仰を知的に明白に理解したが、信ずることを行いにつなげることのできない自らの無能さに落胆していた。「私は宗教の教義の明白な理解をしていた」と、ウィルバーフォースは後年書いている。「それを持って以来最も明白な理解であつただろう。しかしそれは頭の中だけのことだった。さて、今や私は福音を十全に信じ、いかなる時に死のうとも、永遠に滅びると説得された。しかし、それが人間の性なのだが、私は陽気に華やかに暮らした。」

日記に彼はこのように書いている。「どのような狂気を私は追求めているのだろうか。私はキリスト教の偉大な真実のすべてを信じている。でもわたしは、そのようには行動していない。今もし死ぬとしたら、私はみじめな場所に行かなくてはならない。」彼は自分が神に背を向けたことは知っていたが、奇妙なことに、どうやって、振り返ればよいかわからなかった。しかし、後に日記で記しているが、「しかし私は宗教的になるかもしれない。神は求めるものに聖霊をお与えになると約束されたのではなかったか？」

「罰を受ける恐れに影響を受けたということではない。」と彼は言う。「それよりむしろ、語りつくすことのできない神と救い主のあわれみを、こんなにも長い間無視し続けてきた私の罪深さによって、である。それがこの考えのもたらしたものであった。私は、その強い罪責感から、何か月もの間重度の鬱状態に陥った。今までに読んだ他者のいかなる記録も、当時私が感じた事を凌駕してはいない。」

日記と手紙を読めば明白なのであるが、この期間ウィルバーフォースの精神は抑えが利かなくなっていた。何本もの線が一つになっていた。文化と社会に対する彼の考えも一つにまとまっていた。彼は裕福層や特権階級の中に見出さ

れる凝り固まった自己中心に絶望した。彼らは、ウィルバーフォースによれば、死にかけている子供を見棄てる酔いどれの両親のように振る舞っていた。ここで彼は、数年後には彼の人生を通して情熱を傾けることになる二つの事柄のうち一つについてはじめて警鐘を鳴らした。「裕福で贅沢な社会層の中で起こっている普遍的な墮落と時代の不品行は、いまやその有毒な影響と破壊的な毒を人民全体に蔓延させてしまっている。」

これらの真実を受け入れ、それによって生きるということは、国会を離れ、そのあとの50年間を、終わりなき惨めさと、ぼろに身をくるんで、悔い改めながら過ごすしかない、ウィルバーフォースは思っていた節がある。彼に何ができただろう？ウィルバーフォースは自らを世間に、少なくとも友人のすべてに知らしめる必要があると感じた。そうしないということは神を否定するということだという考えを持つにいたったようだった。そしてかれは敢えてそうしない事を、もう繰り返すことはなかった。彼の全存在は、何年にも渡って神を拒絶し、神とその愛を無視し、華やかに自らを楽しませ高揚させ、そして周囲の貧困層や苦しむものたちを無視してきたことに対する苦悶で疼いていた。彼はこのことに関する借りは、決して返せないものだ実感していた。そしてそのような状況にはよくあることだが、彼に対する、神の恵みに目が開かれていなかったことに対して、彼は悔い改めすぎているようにも見えた。

明らかに、ウィルバーフォースはここに来なければならなかった。神の前での罪責感、自らの過ちに対する失望。公衆の面前に曝されるのでなければ、達成されないこと。彼は自らの友人たちにこのことを告げることによって荷を軽くした。このような極度に感情的な状態にあって、彼が友人たちに何を書き、その宣言を読みながら友人たちが何を思ったかは、想像するしかない。あの愛くるしい聡明なウィルバーフォースが「憂鬱になってしまった」という噂が、駆け巡ったが、実際彼はそうではなかったのだろうか？

彼の人生で最も大切な友人はウィリアム・ピットであったが、11月24日付近にウィルバーフォースがピットに書き送った手紙は、苦悩の中で書かれたものだろう。手紙の中で、彼は一国の首相に、その一番の親友であり、政治的な盟友であり、側近中の側近であるウィルバーフォースが政治を離れ、知りうるすべてのことに背を向け、今度は「神のために生き」なければならぬと告げ

たようだ。

ウィルバーフォースには、彼が抱いていた感情を理解し、それを整理する手助けができる存在がいなかった。彼は、必要以上に、苦しんだようである。ミルナーはケンブリッジにおり、ミルナー自身も、馬車の中で過ごした数週間に彼らが議論した事柄について、苦悶していたようである。ウィルバーフォースを導くものは、ミルナーから学び、今や彼にとって自明のことであり、全てを変えた真理のみ、であった。しかし何か欠けていた。それはまるでこのような感じだった。彼が学んだ事柄が、彼の立っていた場所を食い尽くしたのだが、代わりとなるものがないという、感覚だった。だから、彼は、いつ底にたどりつくか、はたして底はあるのかと、思案しながらどんどん落ち続けていた。

彼が心の底から必要としていたのは、悩みを打ち明けることが出来、それを理解し、何をすべきかを知っており、神の愛のもう一つの側面である神の恵みが今の彼には必要であると気付かせることが出来る英知を備えた人物だった。しかし、このいうなれば福音の神の恵みのもう一つの側面について、ウィルバーフォースは聞いたことがなかったようだった。すくなくとも、そのときまでは。それゆえ、ウィルバーフォースは罪責感にうずもれ、ロンドンとウィンブルドンで苦悶の11月を過ごし、この先に何が待ち受けているのかと恐れおののいていた。おそらくこのような感情に支配され、これらの事柄について思索していた時、11月24日付近にピットに向けて手紙を書いたのだらうと思われる。

その日の日記に、精神的・霊的な状態を見ることが出来る。「聖書の朗読に二時間耳を傾けた。パスカルを一時間十五分。一時間十五分の瞑想。ピットが立ち寄り、バトラーの『類推』を勧めていく。彼に手紙を書く決意をする。どのような思いにとらわれているかを彼に知らせることに。このことは多くの辱めを私に残し、私の時間と行動に関してさらに規律を与えるものになることを望む。

ウィルバーフォースの視力はとても低く、時折彼は誰かに大きな声でものを読み聞かせてもらわなければならなかった。彼が二時間の聖書朗読、一時間十五分の濃厚な哲学的な『パンセ』そしてそのあとの一時間十五分の祈りの時間の間中、座っていたということは、印象的な事であるし、ウィルバーフォースがどれだけ熱心であったかを物語るものでもある。

25 日には、聖アンソリン教会での礼拝に参加したことに言及している。「徒歩、そして駅馬車。二人乗り馬車の費用を節約するため。」首相の裕福な親友は、過去に彼が浪費した金への罪責感から、いまや公共の交通機関を使い、歩くのだった。彼は、このようにして貯めた金は、貧困層の世話のために使われるべきだと知っていた。26 日には、「キャムデン・プレイス、そしてピットの所に行くことを断る。しかしあらゆる宗教的な考えはロンドン中に出ていく。私の状況と感情を説明することによって、この辱めから私を解放できればと願うのだが。」

翌日の 27 日は日曜日だった。「私は自らの危機的な状況に目覚め、神との平和に至るまで息をつくべきではない。私の心は固く、あまりに盲目で、自らが全く墮落し、靈的なものに対する目が塞がれていることをわかっているのだが、罪にたいするふさわしい憎しみを得ることが出来ない。」

11 月 29 日。「誇りが私の一番のつまずきの石である。そしてそこには二通りの危険がある。世界そして友人に対する恐れからキリスト者としての生活をやめさせること、そしてもし私が耐え忍んだとしても、ただ無為にそうし続けさせる事である。」

そして、いよいよ、三十日に、事は動いた。少年時代からこの方会っていない、ジョン・ニュートンを訪ねることを考えるのである。この巡礼の旅がどのような意味をウィルバーフォースにとって持っていたかというのは想像しがたい。ジョン・ニュートンはよく知られた人物であり、それも 20 年の間そうであった。彼は当時のロンドンにおける福音主義の最前線であった。ホイットフィールドは 15 年前に亡くなり、今やジョン・ウェスレーは老年を迎えていた。ニュートンは 18 世紀のメソジスト社会において統合と安定を推し進める勢力であった。誰に聞いても、彼は精神的に健康で、神学的にはバランスが取れていた。ニュートンは神の「素晴らしい恵み」を知っており、それゆえ、ウィルバーフォースが今この時期に会わなければならない種類の人間であった。ウィルバーフォースが知っていた何百人という友人の中に、ひとりもメソジストの友人を見つけることが出来なかったと考えることは意味深い。彼はその世界から自らを完全に隔離していたので、彼が直面している状況を理解できる人間を探すには、そのまま、少年時代に戻らなければならなかったのだ。もちろん、こ

の訪問に関してあらゆる類の恐れを彼は感じていた。ニュートンは彼が父のように思った人物であり、彼のことを息子のように思っていた人物である。

勇気を奮い起こし、ウィルバーフォースは古い友人宛に12月2日に手紙を書いた。

ニュートン氏、

[・・・]あなたと真面目な話をしたく願っています。失礼ながら、30分そのために時間をいただければと思っています。もし私を迎えることが出来ない時は、お手数ですが、戸口にて、会見のための時と場所を記した手紙をいただければと思います。時は早ければ早いほど良いと存じます。私は自らをあなたの前にあらわすかどうか、一万もの疑念を内に抱きました。しかし、そうさせまいとする論調は誇りがその根っこにあったのです。あなたはそうするという確信がありますが、生きとし生ける者には誰にも、このお願い、さらには訪問のことを。しかるべき時が来るまでは、口外していただきたくないのです。

追伸：このことは隠密になさなければなりません。下院の画廊は頻繁に人が訪れていますし、国会議員の顔というのはよく知られていますから。

偏見がなく、心を開いたパリサイ人で、人々に知られないように、夜に紛れてイエスを秘密裏に訪れたニコデモのことを思わずにはいられない。このラビには何か人を引き付けるものがあるとニコデモは感じ、イエスから離れることはできなかったが、他の誰にもそのことを告げることはできなかった。その時はまだ。そしてウィルバーフォースもそうだった。

その同じ日、12月2日にウィルバーフォースはピットからの返事を受け取った。ウィルバーフォースがピットに送った手紙は歴史の中に失われたが、ピットの手紙はそうではなく、ここにその全文が再掲されている。この手紙はウィルバーフォースの手紙の内容について強い手がかりを与え、同時にピットの卓越した人となり、彼らの友情の深さを示すものである。

わが親愛なるウィルバーフォース、

水曜日にボブ・スミスが君から受け取った手紙のことを口にした。それは、私が昨日受け取った手紙への心備えとなるものだった。君の人生において新たな時代の様相を呈し、その行きつくところが君の人生そして君の友人にとってとても重要な事によって、非常に道理にかなった影響をうけまいとするために、君のことを煩わせているものがどのようなものか、私はとても興味がある。君の意見が導き出すかもしれない、君のあらゆる社会的行動に関してだが、本質的に主要な原則において君と相違があることを発見する事くらい、ほかの何にも増してこたえることを私は隠さない。

これは起こり得ない状況だということを私は信頼し、信じている。しかし、そうならざるを得ず、私がそのことにおいて大きな痛みを感じなければならないとして、これまでは励ましと喜びは反対の所に見出せたのだが。信じてくれ、このことが、私がお前に対して持っている好意の感情や友情を揺るがすことはないことを。そして私は（君と）別れることが出来たとしてだが、実際、忘れやすく、無自覚にならなければならない。それらは私の心に刻まれた感情で、影響されることも弱められることもあり得ないことだ。もし感じたすべてを吐き出す術を知っていたとして、そして君がすべてを考慮することを望むことが出来るとして、君が固めた決意についてしばらく語らねばならない。君を導いている倫理的もしくは宗教的動機について私が軽く考えているとは疑わないでほしい。考えもしないことだろうが、私は君の理解や決断が間違った方向に進んでいるとも思っていない。しかし、君自身の目的とは反対に作用し、君の美德や才能を、君自身にとっても人類にとっても価値のないものとしてしまう傾向が多々ある原則によって君はやはり自分自身を欺いているのではないかという恐れを表現せずにいられないとしたら許してほしい。しかしながら、この自らの懸念がそのことを強く表現しているという希望があるのだ。なぜなら君は宗教の性質は薄暗いものなどではなく、そしてそれは熱狂主義者のものなどではないとも告白するからだ。しかしそれにしても、憂鬱や迷信をもってしても精神に色を帯びさせることを避けえない、この孤独への備えは何だ？もしキリスト者が人生の幾つかの関わりの中で行動するのなら、全てにおいて引きこもるべきではないのか？確かにキリスト教の主義原則も実践も単純で、瞑想だけ

でなく行動にも導くものだ。

しかしながら、今のところはこれらのことについて詳しく述べることはすまない。君の友情そして君の精神に属する公平さのしるしとして君に願うのは、君の幸せを自身の幸せと区別する術を知らないもの（訳注・ピット）に遠慮することなく、君自身を十分に開放してほしいということだ。君は自らに規定した隠遁生活について、程度や期間について何も説明していない。今までと同じプライベートがもはや必要ないと考える今、君の未来がどのような方向に導かれるのか、君は教えてくれない。手短かに言えば、君は今後実践しようとしている義務についてどのような考えをもっているのかも教えてくれない。私があるような事柄について詮索したとしても君は戸惑うことはないだろう。私を満足させることができるのは、対話だけだ。不安はお互いが持っているかもしれないが、ごちなさやはずかしさは私たちのどちらにもあるべきではない。もし君がこれらの事柄についての君の心の状態を打ち明けてくれるのなら、私が、双方が異なると恐れる点について君に伝えようと企てようとするし、君が間違っていると私が考えている君の考えについて再考することを望むだろうが、君が時間をかけて形成した考えについて、実りない議論で君を煩わせることはしない。私は確信があるが、こんなにも強くこのことを君に勧めようとする動機と感情に君はきちんと向き合ってくれる。私は君がこの事を拒否しないと考えている。もし拒否しないなら、明日のどの時間でも僕が君を訪ねて良い時間を指定してくれ。僕はケントに行くから、ウィンブルドンを通るようにすることもできる。どんな主義原則も議論するに値しないものはないということをお願いだからじっくり考えてくれ。いずれにせよ、君の意見と意図の本質についての十全な知識と広がりには私にとって絶えざる喜びとなることを信じてくれ。

僕のことを信じてくれ、愛情をこめて、変わることなく、
W・ピット

その翌日、12月3日の土曜日に、ウィルバーフォースとピットは二時間にわたり話し合った。ウィルバーフォースは友人を自らの考え方へ改宗させようと努力したが失敗した。それにもかかわらず、その会見はウィルバーフォースを

ほっとさせるものだった。

翌日の12月4日の日曜日、ウィルバーフォースはホックストンのチャールズ広場にあるニュートンの家までみずから手紙を届けに行った。ロンドンにあるニュートンの教会、聖メリー・ウルノウトからは、一マイル以上の距離だった。ウィルバーフォースがニュートンとその日に会おうとしていたのは明白だが、ニュートンはそうすることが出来なかった。しかし、彼らはその週の水曜日、12月7日に会うことを決めた。それゆえ、その水曜日、ウィルバーフォースは再びホックストンへと一人で向かった。そして「自らを励ますことが出来るようになる前に一度や二度広場を歩き回った後、私は老ニュートンを訪ねた。」このことに関してウィルバーフォースが感じていたであろうおののきは格段のものがあつた。これらの年月を経てもう一度ニュートンと会うということにどれほど彼の心は動揺したことだろう。最後に彼らが会った時、ニュートンは48歳で、今は60歳だった。

私たちはその光景を想像するしかない。少年のウィルバーフォースを愛した元船長の老人は、彼に希望を抱いていたが、それらの希望はすべて粉々に打ち砕かれた状態だった。そして、何年もたって、驚きとともに、ニュートンは彼に会う。この情景にはどこかしら、ディケンズの『大いなる遺産』で、年老いたジョーのいる鍛冶場にピップが戻る場面と通じるものがある。ジョーがかつて知っていたその少年を見つめ、つつましい田舎訛りで、「ピップや、お前さんはもう紳士だあな」と述べる場面では、多くのことが感じられるが、それが口にされることはない。

ウィルバーフォースは記しているが、彼は「ニュートンと会話することで非常に感銘を受けた。それは非常に喜ばしく、気取らないものだった。彼は私に、神が私のことを彼のもつとに導いてくれるという希望を常に持っていたと語つた。」

ウィルバーフォースは、彼の苦悩と難しい選択を理解してくれるこの人物のもつとで、心の内をすべて注ぎだしたに違いない。そしてよくあることだが、ウィルバーフォースは彼が恐れていたものは、考えていたように悪いものではなく、キメラ（想像上の動物）だということを発見した。ニュートンは、ウィルバーフォースが予想していたようなこと—神に従うには政治を離れなければ

ならない—は言わなかった。反対に、ニュートンはウィルバーフォースに今いる場所にとどまるように励ましを与え、神は今いる場所であなただけを置いてくださると述べた。ニュートンの立場にある大多数の人間なら、ウィルバーフォースの塩と光が必要とされているまさにその場所から撤退するように主張しただろう。

ニュートンがそう言わなかったことはどれほど良いことだっただろう。ウィルバーフォースは後にこう記している。「私がそこから去るとき、私は自分の心が落ち着いて平静を保っており、いつにもまして謙遜で、より敬虔に神を見上げていたことを感じた。」

この会見の数年後、ニュートンはウィルバーフォースに書き送っている。「あなたが聖メリーの聖具保管室を訪ねてきたときに感じた喜び、そしてわたしが抱いた希望を、決して忘れることはないだろう。」

彼らが愛し、痛みの伴う状況で彼らから取り去られた、聡明で繊細な少年のために、間違いなくこの何年も祈っていたジョン・ソーントンやウィルバーフォースの叔母ハンナに、ニュートンがどれだけこのことを伝えたかったか私たちは想像できる。この知らせを聞いたとき彼らはどれほど喜んだことか。間違いなく彼らは放蕩息子の物語を思った。「なぜならこの私の息子は死んでいたが、再び生きている。失われていたが、見つかったのだ。」

その月の下旬に、ウィルバーフォースはソーントンから手紙を受け取った。「昨日の午後、ニュートン氏と数分会話することによって得られた喜びは、私が説明するより、あなたのほうが簡単に想像することが出来るだろう。」

1月11日に、ウィルバーフォースはロンドンへ向かい、ニュートンの教会へ行き、教会の後はニュートンを伴って、二人乗りの馬車でウィンブルドンに向かった。ニュートンは夕食を共にし、その夜はそこに泊まった。後年ウィルバーフォースが書いているのだが、彼は長年夢を見ていたが、やっとその夢から覚めたようだ。スクルージュではないが、彼は二度目の機会を与えられ、子供時代が彼のもとに戻ってきたような感覚であった。

12日の夜、ウィルバーフォースの知人が、ウィルバーフォースとニュートンがウインブルドン公園を歩いているのを目撃した。そして突然ウィルバーフォースは、もう後戻りはできないことを認識した。「私がメソジストとしてあまねく公言されることを期待するが良い。」と彼は書いている。「真実を持ってそのことが言われるよう、神がおゆるしになるように。」

その年の4月までにウィルバーフォースの生活と精神状態は長く待ち焦がれていた落ち着きを見出したようだった。長く暗い魂の冬が続いたが、やっと春が訪れたのだ。ニュートンは友人のカウパーに、ウィルバーフォースについてこう書き送っている。「私が見るところ、彼は明らかに正しい道を歩んでいる。私の望みは、神が彼をキリスト者としてまた政治家として祝福とされることだ。これらの身分が同一の場所にあるとは何とまれな事だろう。しかしこれらのものは相容れないものではないのだ。」

聖金曜日の4月14日に、ウィルバーフォースは初めて聖餐にあずかった。そして二日後、彼にとってはキリスト者として初めての復活節の日曜日に、エセックスのストック村にアンウィン家を訪ねた時、もう一度陪餐にあずかった。

「もう少しで終わろうとしているこの日ほど、喜ばしい日を過ごした思い出はないのではないか」と彼は妹のサリーに書き送っている。

私は六時前には外に出て、野原を私の祈祷室とした。太陽は真夏のようにまぶしく、あたたかく照り輝いていた。私は、密室は、このように雑多な合唱に囲まれて、全ての自然がこのような朝に賛美と感謝の歌を波打たせている中で持った方がより高揚すると思う。確かに、特にこの安息日はこれらの感情を最高潮の状態で呼び起こす。それは結ばれた愛の炎と勝利の井戸、聖なる自信と抑えられていない親愛の情となる。

彼の日記に、いつものように、より簡潔に彼は記している。「ストックにて。アンウィン家と。喜びにあふれた一日。一日の大半を外で過ごす。聖餐にあずか

る。この上なく幸せ。」(4章終わり)

(インマヌエル郡山教会会員・聖宣神学院在学)